

←卒業生のページ→

子どもと図書館

佐藤 由子

私が子ども文庫をはじめたのは、44年の秋のことでした。小学校二年になった次男が大変な本好きで、本を選ぶことでも、本代の上でも、私一人の力には負いきれないと思うにつけ、石井桃子著「子どもの図書館」（岩波新書）に書かれたような環境を、切実にのぞまずにはいられません。そして、石井さんのかつら文庫を見学し、日本子どもの本研究会や親子読書会に参加しているうちに、本代に困っているはずの私が、家庭で子ども文庫を開く羽目になってしまったのです。旗上げだけすれば、協力者がでて何とかなるだろうという気持ちでした。それに、特に三多摩の母親達のものすごいエネルギーを見聞きすると、ためらっている余裕などなくなってしまうのです。

私は大学に入るまで田舎で育ったので、どんな運動にしろすいすい発展するとは思っていませんでしたが、案の定、会員数はいつまでたっても一けたで協力者は出ないし、私の内戦でまかなう資金の調達や、何の肩書もないものが何かをやることの障害や、意外に苦労は多かったのです。都内にある子ども文庫は私の知る限りでは60位ですが、もっとも多いのは団地であり、地域的には三多摩に集中していることから考えても、これも住民運動の一つといえるかも知れません。児童文学者がやっておられる場合は別として、素人がやるなら、三人でもグループで運営するのが成功の鍵のような気がします。

さて、わが「かしの本文庫」は蔵書が300冊程になり、母親をこんな境遇に追いこんだ次男は、思う存分本にひたって成長しましたが、今年の春長女が交通事故にあったことで一時閉鎖となり（ささいなことで閉鎖になるのも一人でやっているから）、そのうちに、すぐ近くに区立の図書館ができたので、やめてしまいました。

今は親子とも、その図書館の児童室にせせと迫っています。公共図書館ができて、家庭文庫の存在意義はなくならないという意見は、私も正しいと思いますが、文庫を再開するかどうかは、情勢次第と考えています。

不思議なことに、公共図書館の本も私の文庫の本と似ています。それは子どもの本の評価がほど定着したせいであり、それには、あの読書運動に熱心な母親達の力が大いにあずかったのだと思います。ちょうど三・四年は子どもの本のブームでもあり、作家も、あの母親達の要望に応えた

のですが、それは一面あの母親達と心情的に癒着したと思われる作品を生むことになったようです。次男が「日本の作家のものはチマチマしておもしろくない」と批判しているのは、こういう点ではないでしょうか。読書感想文にしても、評価をうけるものがある種のタイプに固定する傾向があります。子どもをとりまく問題は一筋縄ではいかないようです。 (3回生)

ちりからおんがくへ

森 田 恵 子

リサイタルのこと

今年の九月に、グレックス・ステラリス(星のグループの意)演奏会と称して、第一生命ホールでピアノのジョイント・リサイタルをお茶大音楽科卒業生六名で開き、私もその末席を汚しました。皆努力の甲斐あって(私などはもう少しでノイローゼになるところでした)無事に終わり、「ひとりひとりがみな異った音を出し、個性の表われた」演奏であったとの評をいただきました。

私はドビュッシーの「ピアノのために」という十五分位の小曲を弾き、目下ドビュッシーに夢中になっている所です。

ドビュッシーに凝ること

たしか去年の今頃から——これ迄も音楽上のいろいろな人に一時的に凝っては卒業して行ったのですが(例えば小沢征爾、バーンシュタイン、フォーレ、ラヴェル等)——ドビュッシーの音楽をこの上なく美しいと感じ、此度のは今までになく夢中になって、ドビュッシーについての凡ゆること、といっても出版されている全部の楽譜と古今東西の書物を集めることを目ざして私なりに専心し、まだその途中ですが、すでに財力をはるかにオーバーしたため、今は中休みしています。レコードにはまだ手をつけていませんが、さてこれだけあればもうヒモとくの一生かかる位で、隠居後ゆっくり読むのが今から楽しみです。

ピアノが好きになるまで

最近のこと、「へえー、ピアノが好きな人がいるんですか。珍しい人がいるものですね。」と感心されたのか、ばかにされたのか分からないようなことを云われて変な気持ちになりました。ピアノは幼時から習わされ、ずっと嫌いでしたが、戦後たけのこ生活でピアノが無くなってからは大分淋しい思いをし、地理なんて場ちがいなところに入ってしまうとなおさらピアノが恋しくなり、卒業してやっと月ブでピアノを手に入れると、先生について習いました。その先生が音楽のすばらしさを感じさせてくれました。私の一生の恩人といっても決して大げさではありません。